

# エレクトーンのためにかかれたオリジナル作品の芸術的意義

## — 3回のリサイタルシリーズを通して考えた可能性—

市川侑乃（電子オルガン奏者）

進行：森下絹代 書記：西山淑子（文責）

現在のエレクトーン界の傾向として、様々なジャンルの既存の曲をエレクトーン用にアレンジして演奏したり、オーケストラやバンド等の代用品という扱われ方だが、そうではなくエレクトーンにしかできないものとは何か、この楽器から何を発信でき、何を伝えられるのか、という思いで、一楽器として芸術作品を生み出すことのできるエレクトーンの未知なる可能性を追求し、オリジナル作品を増やすこと、世界中の作曲家が曲を書くことによる楽器の発展も期待して、昨年から年2回、自主企画でリサイタルを開催し始めた。これは演奏家として大切な姿勢だと自負している。

この3回のリサイタルの経験を元にエレクトーンオリジナル作品の芸術的意義を、演奏音源の紹介と共に説いた。

### 【委嘱作曲家との関わりの中で】

エレクトーンはなんでもできるスーパーマシンと思われがちだが、できないこともある。委嘱作曲家と共に曲を完成させてゆく（レジストは奏者が作るという楽器の特性から共同作業といっても良い）中で見えたエレクトーンの可能性とは？

#### 白岩優拓作品『サイレント・ウェーブ』

イニシャルタッチ、アフタータッチ、ピッチベンドの多用で、ピッチをずらす。楽器を熟知した作曲家だからできる発想。

#### 田口知行作品『Sagittarius』

シンセに精通した作曲家で、求められのは、非常に歪んだ音色やグラデーションのように徐々に音を歪ませること。しかし、エレクトーンでは難しい(できない)。

#### 中堀海都作品『エレクトーンとエレクトロニクスのための“水月”』

エレクトロニクスを使用するのは、エレクトーン界では初めて。音量バランス、接続などがうまく行かず、エレクトロニクスのパートのノイズはもう1台のエレクトーンで出した。シンセやDTMと似ているようで違うところがエレクトーンの個性でもある。

### 【再演することの意義】

これまでにたくさんの作品が書かれ初演されたきたが、そのほとんどは再演されることはなく埋もれている。これは非常に残念なこと。再演当時とは違う現在の機種で演奏することで、また奏者が変わること

でジストは変わり、新しい作品として生まれ変わる。

また過去にはできなかったことができるようになる可能性も秘めており、「改訂再演」も期待出来る。

#### 一柳慧作品『雲の肖像』(1987年)

HX-1で初演された。不確定要素も見られ、楽譜に試行錯誤の痕が残っており、作曲家と奏者の情熱が読み取れた。当時の楽器にはなかったエフェクトなども使い音造りした。

#### 山根明季子作品『Dots collection No.14』(2012年)

スピーカーをステージの前方に2つ、後方に2つ置き、Panを利用して音をいろいろな方向へ飛ばす。DelayやPitch変化の使用はエレクトーンならではの効果。

#### 綿村松輝作品『エレクトーンとテープのための“水紋”』(1999年)

当時は水の音源は、水琴窟で録音し、コンピューター処理したものを流していたが、今回は水の音はコンピューターで作成、ロジックで流しながら演奏した。

### 【リサイタルのプレトークでの作曲家の意見と活動の中で見えてきた課題】

- 1.この楽器独自の名称もあり、シンセでは容易だがエレクトーンでは難しい、またその逆のことも多々ある（なんでもできるわけではない）ので、初めてこの楽器に触れる作曲家が見てもよく解るようなマニュアル作りが必要。
- 2.記譜法とレジスト作りの問題点。
- 3.記録媒体（録音、録画、印刷物）の重要性。

### 【今後への期待】

- ・メーカーの垣根を取り払い、他社の楽器とのコラボ。
- ・エレクトーン界以外の様々な分野からの見識を得る。
- ・他楽器や現代テクノロジーとのコラボ。
- ・楽譜の出版。

エレクトーンの限界にもぶち当たるが、作品に真正面から立ち向かい、その枠組みの中で、独自のスタイル、機能、奏法など、その魅力を最大限引き出すことを心掛けている。